表現における近代

——文学・芸術論集——

大岡　信著

岩波書店

表現における近代
一九八三年八月一〇日　第一刷発行©
定価一八〇〇円
著者　大岡信
発行者　緑川亨
発行所　株式会社　岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二―五―五
電話 〇三―二六五―四一一一
振替 東京六―二六二四〇
印刷・三陽社　製本・松岳社
落丁本・乱丁本はお取替いたします
Printed in Japan

I　創造の場

幸田露伴の東京論……三
創造的環境とはなにか……二九
——「中心と周縁」という主題をめぐって——

II　抒情の近代

新古今集との出会い……八七
正岡子規の多産性が意味するもの……一一三
斎藤茂吉における近代……一三七
——写生説を中心に——
釈迢空の歌の特性……一六三
——「海やまのあひだ」について——

Ⅲ　コスモスの鼓動

憂愁の滋味 ……一八五
——岡倉天心の思想の特質——
波津子・天心・周造 ……二〇九
天心とベンガルの女流詩人 ……二二七

Ⅳ　〈中間者〉と道化

人ミナ道化ヲ演ズ ……二五一
——近代性の証人としての道化——
パゾリーニとはだれか ……二七一
恐るべき〈中間者〉への渇望
死と〈天使〉の観念

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

詩における「知性」と「感性」……二九
——ジョン・ダンの詩そのほか——
初出一覧……三二
あとがき……三三

装丁　宇佐美圭司

I 創造の場

前頁図版＝狩野長信　花下遊楽図（部分）　東京国立博物館蔵

幸田露伴の東京論

1

十数年も前のことだが、建築雑誌「SD」第三号に、建築史家内藤昌氏の「江戸と江戸城」という論文がのったことがある。内藤氏のその後のすぐれた江戸論の、たぶん最も早い時期の記念的論文だったと思われるが、江戸という都を、建物とその居住者たちの関係から論じた文章で、いくつか目のさめるような思いのする指摘をそこで読んだ。

享保のころ、すなわち一七二〇年代、江戸の人口は早や百万を越えていたという。欧州第一の大都ロンドンが当時七十万に足らず、パリは五十万だったというから、江戸の人口の過密ぶりはまさに世界一だった。しかし、注目すべきは、その人口の内訳と、各階層別の居住地面積をめぐる問題であった。百万人の江戸居住者のうち、町人は五十万以上、寺社地人口が約五万、残りが武家だったが、これを居住地面積の方から見ると、江戸の全面積の六割が武家地、二割弱が寺社地、残りのわずか二割強の中に、五十万以上の町人がひしめいていた。その人口密度は、実に一

平方キロ当り五万六千人と推計される。内藤氏の論文が書かれた当時の一九六三年度東京区部の人口密度は一万四千人だった。現代の東京の人口密度でさえ、世界有数のものである。それの四倍の人口密度で江戸町人の生活はいとなまれていたということになる。

この結果どういう生活形態が生じたか。いうまでもなく、密集する裏長屋、すなわちスラム街の発生であり、いったん火が出れば必ず大火になるほかないような住居条件の恒常化である。火事は江戸の華、というのは、そういう都に住む人々の、やけくその諧謔にほかならなかった。

内藤氏は右の統計の上にたって、およそ次のような結論をのべていた。

江戸はつまりは「武家の都」であり、町人はつねに忍従を強いられる側だった。商人の経済力の発展も武家の消費生活に寄生したものにすぎず、江戸の町並も、町人文化も、すべて「忍従のうちにじみでた様式」ではなかったか。町人地の拡大も、徐々ににじみ出るようにして大きくなったもので、町人の経済力があり余って自主的、建設的に発達したものではなかった。

「この意味で、江戸は都市としてすでに十八世紀以降老化現象におちいっていたと考えられる。いまから二百年も前のことである。」

2

右の結論はショッキングである。しかし、冷静な史家の目から見れば、江戸という都の肉体は、たしかに早くから老化現象に見舞われていたことになるらしい。そして、都市の物質的諸条件と、そこに住む人々の精神や感性とは、とうてい切離すことのできない有機的関係をむすぶものである以上、江戸文化もまた早くから老けていた、ということになるのも、どうやら避けられない結論のようであった。

たしかに、江戸文化を振返ってみて、そこに主導的勢力としての若者たちの群像を見出しうる時代があったかと考えてみると、これはまず探し出すのが困難である。幕末の洋学者の一群や志士の一群を除けば、私の貧弱な歴史的知識では、そういう例を見出すことができない。幕末に呼応して、たとえば幕府初期には天草四郎時貞のような青年がいたことを思い出すが、天草四郎を生んだのは、主にキリシタン信仰という外国産の思想であった。

浮世絵にしても落語にしても、それらへの嗜好には、はち切れるような若さからはかなり遠いものが感じられる。同じ裸女礼讃の思想の具象化といっても、ヨーロッパ絵画のヌードと浮世絵のヌードとでは、描かれる女自体の意味にかなり本質的な違いがあり、そのことはそれらを愛好する市民たちの嗜好の質の違いにそのまま照応していた。ヨーロッパの裸体画は、少なくともかつて女神たちや貴族の女たちを裸かにした歴史の上にきずかれている。他方、日本の裸体画は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いってみれば遊女たちを裸かにすることから始まった。つまり、日本の裸体画は、大体において好色の精神の表現に始まって、久しくその領域にとどまったままだった。

好色の精神を若々しいと言うには、少し無理があろう。女の行水を亭の屋根から遠眼鏡でのぞく世之介は、十歳に満たぬ小僧っ子とはいえ、もう十分に世故にたけているという印象がある。浮世絵の美人画を買って楽しんだ人々の嗜好も、そこからそんなにかけ離れたところにはなかったのではなかろうか。つまり、好みが老けていたのである。

それは、別の観点からすれば、それだけ江戸の文化が爛熟していたということにほかならず、「わび」とか「さび」とか「細み」とか「しをり」とかの舌触りを楽しめる人々が少なからず存在したということだけでも、江戸時代の趣味の水準の高さは敬服に値した。

腰ひとつ浮かさず、舌先三寸で世態風俗を活写し、人情の機微をうがち、庶民的ドラマを演出し、かつみずから演じてみせる落語のような芸は、まさに江戸を首都にしていた時代文化の粋ということができるわけで、それを若者も聴いて大いに楽しむことはできるにしても、芸の本質からいえば、これもまた、したたかに老けた味わいをもつ芸能にちがいなかった。

3

さて、以上のような事実の、それはそれとして、その江戸のまちで、人々は現実に毎日生きていたのである。生きている人々は、自分たちの首都が十八世紀以来老化現象におちいっているなどという認識は、全く持たなかっただろう。近くに火事が起れば運が悪いとあきらめをつけ、類焼をまぬがれれば胸なでおろして火消組纏持の勇姿をたたえた。その日ぐらしというのは、現実の日常生活においてと同様、彼らのものの考え方の基本構造でもあった。

けれども、さあご一新だ。おンまのまァえにヒラヒラするものがやってくる。一夜明ければ、都は異郷出のむやみやたらに威勢のいい青年占領軍の足下にひざまずいていた。薩長土肥の西南人士はお公卿さまになり、新都建設の号令をかけた。けれども彼らはかつて大都会を支配したこともなく、そこで暮した経験にさえ極めて乏しく、しかも江戸市民は反抗的ときていたから、東京を真に首都にふさわしい都にしようとする情熱も愛情も方策も乏しく、むしろ栄華に溺れて私欲情欲にはしるという傾向に走ったのは、無理からぬところでもあったろう。かくして、天下は青年の手に帰したが、老いたる江戸は、そのまま足萎えた東京に移ることになった。

4

幸田露伴が「一国の首都」を執筆したのは明治三十二年夏である。同年十一月から十二月にわ

たって「新小説」の付録として公刊された。

この論文は、全集版で百三十頁に近い大論文であるが、露伴の自己覚醒、人間研究、社会研究の結果と、読書研精の結果との胸中に鬱積したものが、当時種々な人々によつて盛んに唱道されつゝあつた都市改良の空気に応じ、愛市愛郷の一念にかられて猛然爆迸したものといつて可い。当時の文壇とか文士とかいふものゝ社会的位地を考へ、その頭脳中に有するものを考へてこれを読むと、まことに曠世の奇文といつてもよいもので、この一文だけでも露伴の名は永久に伝はることが出来たらうと思はれるほどの大論文である。

柳田泉の名著『幸田露伴』(昭和十七年)はこのように絶讃している。けして過褒の言ではない。今日この、優に新書判一冊分はあろうという大論文を読めば、むしろますますその着眼の卓抜、論の用意周到、全篇に横溢する東京への愛情と、都民の自覚を呼びかける情熱にうたれずにはいられない。柳田氏の右の著書には、明治二十六年七月二十三日付「国民新聞」の「的面生」署名の記事「露伴に与ふる書」が引用されている。

僕現今文学者に就て最も強健なる脳力を有するものを数ゆるに、先づ君(露伴)と二葉亭とに向て其指を屈せざるを得ず

若し文学界の人にして、政治家の洗霊(マヽ)を授けて、役に立つべきものを求めば、君と二葉亭とに向て第一の洗霊を与へざるを得ず云々（中略）君風流仏とか何仏とか腥き小説を作りて愚人を驚かさんよりは、何ぞ社会の半面たる、最暗黒、最悪毒に向て、君の利剣を突き込まざる、峭直、鋭利の筆鋒、厳励、精緻の観察、その世道人心に益する果して幾何ぞ云々

柳田氏はこの匿名記事の筆者が、露伴の「頭脳の強健さ」をつとに指摘していたことに敬意を表し、「吾等は、此の『一国の首都』に於いて、露伴のその方面の幾分を見ることが出来るわけである」と書いている。

私が目下参照している「一国の首都」の本文は、露伴の明治中期までの随筆を集めて編んだ『長語』によっている。『長語』は、もう一冊の随筆集『讕言』とともに、明治三十四年に刊行され、壮年期までの露伴の、小説をのぞく作品の集大成をなす。私の手もとの『讕言』も『長語』も、昭和十五年冨山房百科文庫として再刊されたときの本なので、未見の初版本と目次面の

細部が同じかどうか知らないが、この文庫本『長語』の目次には、「一国の首都」(明治三十二年夏)の内容が、本文中にはない小見出しの形で詳細に示され、はなはだ便利である。私の文章は、この論文のすべての内容にわたって紹介することを目的とはしていないので、この便利な目次見出しをそのまま写しておこう。内容に応じ私意によって註と改行をほどこす。

○首都の全国に及ぼす影響　○国の首都に対する関係　○国民は何人も首都を愛せざるべからず　○都に対する愛情　○江戸と江戸児と　○東京と東京人と　○江戸と東京との相違　○江戸の建設者—徳川氏—三河侍—甲州侍—其他　○東京の建設者—明治政府—薩州人—長州人—其他　○江戸の初期　○東京の初期　○薩長土肥の人士等が東京に対する愛情の欠乏　○東京の堕落　○明治の初年の情状　○現今の情状　○徒に首都を罵るべからず　○東京の堕落せし所以　○優者の放逸　○劣者の卑劣　○江戸の末路の堕落　○我が首都をして至善至美ならしむるの道　○都民及び国民の自覚　○自覚は真智也　○自覚は真徳也　○首都に対する個人の位置の自覚　○都府と個人との関係の緊密なること　○都府に対して懐くべき至当の感情　○都民自覚の機　○江戸の破壊者は東京の土着の士となりたり　○東京は江戸の民のみの東京にあらず　○地方の人士は東京の人士となれり　○自覚—信仰—理想—理想

境　○理想境と実在界　○時代の理想　○明治時代の理想境の首都　○全般の理論と部分の問題と　〔以上がいわば第一部総論「江戸から東京へ」ともいうべき内容〕

○東京に対する要求希望　○東京を野の市たらしむべからず　○東京を漫然たる人間集会処たらしむべからず　○旧江戸人は萎縮し新東京人は自己中心に過ぎ居らずや　○東京を日本の東京たらしむべからず　○東京は世界の東京たらしむべし　〔以上がいわば第二部「東京を近代的世界都市たらしむべし」とする大眼目の提示〕

○市政　○市内市外の区劃線　○市の内外の区劃線の必要　○日本と支那との城の意義の差　○都の無限の膨脹　○都の面積と其実質　○狭くして長き市―松坂　○平面にして厚さ無き市―白石、下田　○都の面積と富との比例及び各般の設備の経費との比例　○都外は都外たらしむべし　○都は都たらしむべし　○都内の事物の配置は自然に任すべきや人為に託すべきや　○都の教育機関　○都には幼稚園を要す　○悪魔の幼稚園　○都の交通機関　○都の道路　○都の飲用水　○上水水源の保護　○都の悪水排泄　○江戸は人為によりて成れる地なれば排水設計は最も努むべし　○東京の卑湿の地　○塵芥糞尿排除の方法　○理髪業者の取締り　○共同浴場の取締り　○火災盗賊の防備　○鳶と警察官と　○半公半私土地専属の準警察官を設くべし　○盗賊取締り　○多く公園を設くべし　○都の中等以下の民と公園と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com